オートバイと旅の最高の瞬間。永久保存版BEST SHOT集第1弾!!

OR outrider

アウトライダー
2002 JANUARY
01
定価630YEN



FIRST FEATURE
Very Impressible Photographs in 関東&信州

SECOND FEATURE
人気企画復刻第1弾
FUN LAND Special



迷いに行きますので

Interview 芦奈野ひとし

文＝菅生雅文 *Sugo Gamon*
写真＝中筋 純 *Nakasuji Jun*

トコトコとハンターカブで現われた芦奈野ひとしさんは、独自の世界観が魅力のコミック『ヨコハマ買い出し紀行』の作者。作品と同じくオートバイライフもゆっくりのんびりのようです。

芦奈野ひとし氏の描くコミック『ヨコハマ買い出し紀行』は、人類の終末を意識させる近未来SFでありながら、その世界には奇妙な平和感が漂う。シュワルツネッガーが出てきそうなバイオレンス世界でもなければ、バック・トゥ・ザ・フューチャーやドラえもんが設定している超ハイテク世界でもない。

芦奈野氏の頭の中にある近未来は、氏の言葉を借りるとこうだ。〈のんびりとした時が流れ、のちに〝ゆうなぎの時代〟と呼ばれる時代〉。舞台はヨコハマにほど近い片田舎で、自然破壊による異常気象が進んだ結果か、海面が異様に上昇、それまで海抜の低かった平野部は水没。相模平野は湘南湖と呼ばれる汽水湖になり、陸続きだった江ノ島は孤島になるなど、いずれ世も終わりを迎えるかといった環境下なのだが、田畑には作物が実り、草原にはススキが揺れ、海は美しく光り、星は青く輝く。大人も子供も、元気に、快活に日々を送っているのである。

描かれる風景は、あくまでも、おだやか。陸地はどことなく北海道の広大さを想わせ、海は沖縄のちゅら海のごとく。のんびりと平和なのだ。

「今まで多くの人が描いてきた『人類がいなくなるとき』っていうのは、まさに砂漠みたいな世界とか、そういうのばっかりでしたよね。でも、もし人類がフェードアウトしていくんだったら、老後と言ったら変ですけど、時代の夕方みたいな、そういうのもあるのかもしれないなあと思って。気がついたら人が少なくなってたとか、そういえば昔『人類』って流行ってたよなあ、とか」

そこに暮らす人も減り、浜も漁村も道も海に沈み、丘には廃墟も目立つ。だが、氏の描く風景には荒涼感がない。かつての宅地には草がぼうぼうと生えているが、それは荒れている、のではなく、イキイキと描かれている。

「私が子供のころ住んでた横須賀あたりって、昔、軍隊がありましたから、要塞や防空壕の跡ですとか、昭和30年代あたりに流行っていたらしいカフェの廃屋とか、朽ちかけた白ペンキの米軍住宅とか、そういう廃墟がやたらとあったんです。どれもだいたい、斜めに光が当たっていて、犬が2、3匹歩いてたりして、独特なんですよ。レンガがぼやーんと光ってたり、草はボワ～っと生えてますしね。そういうの見てると、なんかこう、哀しいとか寂しいというのと違うんですね、独特なものを感じるんです」

いくつにも時を重ねてきた風景が、安らかに死を迎え入れているさま、とでも言えばいいだろうか。

この物語は講談社発行の『アフタヌーン』に95年から連載されており、編集部に寄せられる読者ハガキの人気アンケートでは常に上位をキープ。今のところコミックスとして8巻までまとめられており、実売数は重版につぐ重版で現在は15万部以上。芦奈野氏は、デビュー作であるこの作品で一躍人気作家の仲間入りを果たしたわけだが、アシスタントを使わず、人物から背景まで、すべて自らペンを入れている。ふつうは人物だけを描いて、背景はアシスタントにまかせる、というのがパターンなのでは、と訪ねると、

「私、背景が描きたいんですよねえ。そんなオイシイとこ、人には渡せません(笑)」

とキッパリ。氏の、風景へのこだわりは相当のものだ。

主人公の人型ロボット（可愛い女の子だ）は日常的にスクーターを足にしているのだが、芦奈野氏も軽二輪を所有、主人公同様にツッカケ気分で乗り回している。バイクはハンターカブ。まさに履きこなす、といった感じだ。

「今は武蔵野に住んでいますが、ここに越してきたときは新鮮でした。横須賀は〈海と山〉が迫ってくるような土地ですけれども、ここは広々とした土手があって、四方を見渡せて、地平線が見える。私、土手って好きなんですよ。以前に乗っていたAG200でも、よく土手に行きました」

利根川、渡良瀬川、霞ヶ浦……。見せていただいたツーリング写真は、どれもこれも土手。半島育ちだから、広い風景に憧れているのだ、とも。

「バリバリのオンロードバイクもいいんですけど、ハンターカブやAGみたいな、そこそこ荷物も積めて、手荒く扱っても大丈夫なバイクがいいですね。テントや寝袋を積んで、迷いに行きますんで。田んぼのあぜ道とか、河原とかでも走れないと……」

迷いに行く。

迷うことを回避するのではなく、むしろそういう状況を好んで受け入れる。寄り道、まわり道、気持ちの赴くままに走れば、何かがあるかもしれない。ないかもしれない。なくても、いいのかもしれない。プチ放浪。

撮影は、氏が好きだという土手で。カメラマンがポーズを指示するたび、照れまくる芦奈野氏。作品の最終話の構想を訊くと、

「一応、あるんですけど、行き先って途中で変わるものですよね」

作品づくりも、ひとつの旅なのだ。

あしなのひとし／マンガ家。1963年4月生まれ、神奈川県横須賀市出身。94年、『ヨコハマ買い出し紀行』が講談社・アフタヌーン四季賞を受賞、同作品がデビュー作となる。バイク歴は、マンガ家の友人宅で居候のアシスタントをやっていた25歳ごろからスタート。休みのたびヤマハAG200で関東近県を走り、そのとき焼き付いた光景が作品にも活かされている、とか。現在は埼玉県朝霞市在住。



『ヨコハマ買い出し紀行』
舞台は温暖化によって水位が上昇した近未来の世界。主人公はヒトと同じ心と姿を持つロボットの女の子・アルファ。喫茶店を営みながら帰らないオーナーを待つ——。終末を迎えようとしている世界で、のんびりと明るく生きる人々の姿を独特のタッチで描く。月刊アフタヌーン（講談社）で好評連載中の作品。単行本は8巻まで発売中。